

自我の社会学理論の越境 ——『自我の起原』と『生成の社会学をめざして』を中心に——

立教大学 奥村 隆

本報告は、2014 年 6 月の日本社会学史学会大会シンポジウムでの報告（「共同体の外に立つ——日本の社会学を英語で伝える」ことをめぐる試論」として『社会学研究』第 37 号（2015 年 6 月刊）に収録）の問題意識の延長上にある。その報告で私は、日本独自の社会学を展開した社会学者たちの研究成果が「世界という舞台」に発信できていないのではないかと述べた。振り返ってみると、私たちは数多くのマルクス研究やヴェーバー研究を、ブルデュー研究やルーマン研究を、さらにはバウマン研究やベック研究までもっている。では、私たちは「見田宗介研究」や「吉田民人研究」や「作田啓一研究」をもっているのだろうか。そうした研究をこれまでもっていないとすれば、それを海外へ発信することは不可能だろう。ではなぜそれを行ってこなかったのか。

だが「海外への発信」ということは、おそらく学問にとって副次的なことなのだろう。ここではより単純に、以前の世代の社会学の成果が検証されず、現在に継承されていないのではないかと、いうことを指摘しておきたい。カール・マンハイムがいうように、私たちは「自分が属している集団の言葉で話す」。「厳密な言い方をすると、単独の個人が思考する、というのは誤りである。正しくは、個人は彼以前に他人が考えてきている思考に加わる、といったほうがよい」（Mannheim 1929=1978: 99）。私たちは、自分がどのような思考に加わっているかを理解しているのだろうか。

作田啓一と見田宗介。1922 年と 1937 年に生まれたこのふたりの社会学者は、それぞれ膨大な業績を残しており、直接の教え子をはじめとしてより若い世代の社会学者に大きな影響を与えてきた。彼らを対比するとき、すぐにさまざまな類似を発見することができる。ともに初期に「価値」を主題とした著作を刊行し（作田『価値の社会学』1972 年、見田『価値意識の理論』1966 年）、文学に刺激を受けた研究を進めている（作田『個人主義の運命』1981 年、『ドストエフスキーの世界』1988 年、見田『宮沢賢治』1984 年など）。また、なんらかのユートピアの構想を描こうと試み（作田『ジャンージャック・ルソー』1980 年、見田『人間解放の理論のために』1971 年、『気流の鳴る音』1977 年、いずれも真木悠介名義）、現代社会における悪や犯罪を論じている（作田「酒鬼薔薇少年の欲動」1998 年（『生の欲動』所収）、見田「まなざしの地獄」1973 年（『現代社会の社会意識』所収）など）。そして、こうした検討を進めるために、このふたりが「社会学理論」を用い、独自の展開を試み続けたという点でも共通しているといえるだろう。

しかし同時にその差異に注目する人も多いだろう。一例をあげるならば、同じ「価値」を定義するにもこのふたりのアプローチは異なる。見田宗介は『価値意識の理論』の「第一章 価値と価値意識」で、「価値を「主体の欲求をみたす、客体の性能」と定義する」と記す。「欲求」とは、道徳的・芸術的・社会的などあらゆる分野において、「あるものを望ましいものとする傾向のすべて」のことを指す（見田 1966: 17）。これに対して作田啓一は『価値の社会学』の「第一編 社会的価値の理論」で、「日常用語では価値は何らかの欲求を満たしうる客体ないし客体の性質を意味する」（作田 1972: 14）としながら、

たんなる欲求充足ではなくなんらかの欲求充足をおさえることで到達したものが価値である、とし、「価値とは犠牲の対価である」と述べる。「価値は否定を受けた欲求の見返りとして肯定された欲求を満たし得る客体に付着する」(ibid.: 17)。「望ましき」と「犠牲」という参照点を見ると、ここには根本的な発想の相違が存在するようにも見える。

1993年に、作田啓一と見田宗介は「自我」を重要なテーマとした著書をあいついで刊行した。作田は前年の10月に脱稿したという『生成の社会学をめざして——価値観と性格』を3月に、見田は1992年9月以降に『思想』と『文学』に発表した論考をもとに『自我の起原——愛とエゴイズムの動物社会学』を9月に真木悠介の名義で、それぞれ刊行している。この二著も、きわめて重要な共通する特徴と、決定的な相違をもっている。本報告はこれを測定することを試みたい。

私なりに表現すれば、この二著は社会学という学問の境界を踏み越えようとする点で共通している。このふたりの社会学者は「社会学」からはみ出してしまふ。いやむしろ、このふたりは「社会学」を置き去りにしてしまうように見える。見田は副題にあるように「動物社会学」という言葉を用いるが、「自我の比較社会学」の予備作業(真木 1993: 5)と位置づけられる本書は、生物の発生から論じ始めて人間に自己意識に至るところで終わるものであり、通常社会学が対象とする範囲を越えている。作田は本書で「生成の社会学」を標榜するが、制度が人間を作る側面を強調する「制度の学としての社会学」「〈制度学〉」ではなく、人間が制度を作るアプローチである「人間の学としての社会学」「〈人間学〉」を作ろうとし、その代表者としてフロイトの名をあげる(作田 1993: 2-3, 11)。こうして、ふたりとも通常社会学(ノーマル・サイエンスとしての?)を越境するのであり、越え出ようとする方向や原動力はある重なりをもち、同時に異なる。

本報告はこの二著を対比することを中心作業とするが、その準備作業として、私なりに選んだ二組の対になる仕事を検討することを予定している(大会までの作業によって変更がありうる)。一組は「まなざし」と「羞恥」という「自我」を形成する重要な機序について論じた初期の論考であり、作田の「恥と羞恥」(『価値の社会学』所収)と見田の「まなざしの地獄」である。もう一組はこれらの論考から1993年の二著にいたる重要なステップとなる著作であり、作田の『ジャンー・ジャック・ルソー』、見田の『宮沢賢治』というひとりの思想家に照準した作品を扱いたい。ルソーと宮沢賢治もまた、他者の「まなざし」に貫かれて「羞恥」を覚えた自我たちであり、その自我からの解放を模索した人々であるからだ。このようにして1993年の二著にいたる軌跡を辿ることで、ふたりの「自我の社会学理論」(それは同時に「他者の社会学理論」でもあるが)の異同、そしてその可能性と限界を、より正確に把握することができるだろう。

参考文献

- 真木悠介 1993 『自我の起原——愛とエゴイズムの動物社会学』、岩波書店。
Mannheim, K., 1929, *Ideologie und Utopie*. = 1978 (高橋徹・徳永恂訳) 「イデオロギーとユートピア」、『世界の名著 68 マンハイム・オルテガ』、中央公論社。
見田宗介 1966 『価値意識の理論——欲望と道德の社会学』、弘文堂。
作田啓一 1972 『価値の社会学』、岩波書店。
——— 1993 『生成の社会学をめざして——価値観と性格』、有斐閣。